

岩手大学金石キャンパスでは、金石市の「学生活動支援事業補助金」を活用し、学生が地域と交流・連携するイベントを実施しています。令和3年度は6月から7月にかけて、2名の学生が3つのイベントを企画・開催し、市内小学校児童や一般市民の方々と交流しました。魚やラグビーといった、金石の特色や地域資源を活かして開催されたイベントの内容をご紹介します。
(文・金石市共同研究員 佐々木)



釜石小学校6年生と学ぶ ドンコの解剖とかご漁の学習

6月4日(金)、釜石小学校での授業は「このドンコは何歳でしょう?」というクイズから始まった。画面に映し出されたドンコ(標準和名はエソイソアイナメ)を見ながら真剣に考える6年生29名の様子に、釜石キャンパス大学院1年の石黒智大いしぐろ ともひろさんは「児童がクイズに興味を持ってくれて嬉しかった。やっぱり魚に興味がある子が多いですね」と感心したという。

釜石市内の小学生に向けてのドンコの授業は、2回目という石黒さん。1回目は、今年3月に釜石市



が主催で実施した「こどもエコクラブ事業」で、講師として小学生約20名の前に立った。その経験もあってか、今回も児童の反応を拾いながら分かりやすくドンコの生態について説明していく。説明が終わると、いよいよドンコの解剖。

目の前に置かれた、海から揚げられたままの姿のドンコに、児童たちは興奮の様子。児童1人につき1匹が準備されたドンコにキツンはさみを恐る恐る入れながら、「魚に初めて触った」、「ここはどここの部位?」と興味津々の声を上げていた。

沿岸の生態系を研究する上で重要な生物であり、地元で昔から愛されている魚であるドンコを研究

対象としている石黒さんは、熱心な普及活動も行っている。今年度は、県内の観光団体にドンコのフランス料理をふるまうイベントで、ドンコの生態を解説した実績がある。本来であれば、今回の授業でも、ドンコを調理して食べるところまで実施したいという意欲があったが、新型コロナウイルス感染症対策のため、残念ながら計画に盛り込むことができなかったという。「来年度に授業を行う際は、調理もしたい」と石黒さんはさらなる意欲を見せた。

ドンコの解剖終了後は、市内の尾崎白浜地区でかご漁の漁師をしている佐々木洋裕さんからの授業が行われた。漁に使用する道具や、かご漁で獲れた魚を実際に教室に持ち込んでの授業に、児童は熱心に見入っていた。

定置網漁業体験と 獲れたて魚の寿司を味わう会

7月3日(土)、桑の浜漁港からツアー参加者に乗せた船が出たのは朝の4時。釜石キャンパス4年の古澤直哉ふるさわ なおさんが計画した定置網漁業体験は、天候に恵まれた。実は

このイベントは令和2年度にも計画し、荒天により開催を見送ったという経緯がある。「無事開催できてほっとしました」と古澤さんは笑顔を見せた。

ツアーに参加した市民9名には親子連れが多く見られた。船が定置網をしかけた場所に到着し、網を起こすと様々な種類の魚が取り込まれ、船上はにわかに活気にあふれた。次々と船上に現れる魚に、参加者からは熱い視線が注がれる。特に盛り上がったのは、大人でも抱えられないほどの大きさのマンボウが現れた瞬間。参加者からは歓声が上がった。

水産業への関心を高めることを目的とした定置網漁業体験。参加



者が学びを得たのはもちろんのこと、対応した漁業者からも「市民の方に船に乗っていただき、仕事の現場を見てもらえるのは張り合いがある」との反応があった。

港に戻り、お待ちかねの「漁師の朝食」では、その場でさばいた刺身

などが食卓を彩る。参加者たちは、透明感あふれるスルメイカの刺身などに舌鼓を打った。

朝食を終えて一旦解散し、午後には魚河岸テラスに集まった参加者は、寿司職人から魚のさばき方、寿司の握り方を学んだ。難しさを体感しながらも、自分たちで握った寿司の味は格別だ。参加者たちは水揚げ当日しか食べられないマンボウの肝の握りも味わった。

「漁獲の瞬間という、生産現場を見た魚を食べるといふのはとても貴重な機会ですよね。安心感があります」と、学生によるイベントを補助した釜石キャンパスの齋藤事務補佐員は言う。食の安全という言葉が叫ばれて久しいが、海産物は船に乗らなければ生産現場を見ることはできない。古澤さんが計画したこのイベントは、「魚のま

ち」釜石の海の豊かさに加え、漁獲から流通までの過程を実際に見ることで、安全で安心な水産業についても考えるきっかけとなった。

釜石シーウェイブスの選手と 釣りで交流しよう!

7月10日(土)の朝、唐丹からに湾を出港した船の上には釣り竿を持った市民10名と、地元のラグビークラブである釜石シーウェイブスの選手5名の姿があった。釜石市のキャッチフレーズ「鉄と魚とラグビーのまち」のうち、「魚」と「ラグビー」を同時に体験するこのイベントは、釜石キャンパス4年の古澤直哉さんが計画した。高校時代にラグビー部に所属していた古澤さん。シーウェイブスに高校ラグビー部の先輩が在籍していることから、今回の開催につながった。

シーウェイブスには釣りのクラブがあり、日頃から釣りを楽しんでいる選手が多いが、船での釣りは初めてのこと。市民からの参加者は親子連れが多く、シーウェイブスのシニアチームである「シーウェイブスシニア」から



の参加も見られた。初心者も多く参加していたが、指導者が乗船していたこともあり、1匹も釣れずに終わる参加者は1人もいなかった。多い方は、3時間で10匹近くの魚を釣り上げた。

選手と参加者は、船上で記念撮影などの交流をした。釣りを終えた後は、防波堤の上で選手のデモンストラクションが行われた。華麗なパスワークに参加者は目を輝かせた。また、ラインアウト(ラグビーの試合において、ボールがフィールドの外に出た際に試合を再開させるためのセットプレー)の体験も行われ、参加者が選手のたくましい腕で高く持ち上げられると、晴天の下で歓声が上がった。